

東京都主催 秋冬の東京を文化で彩る 新たな都市の祭典

アルテ ・ トーキョー

ARTE TOKYO 2026年10月開幕

臨海地域 / 日比谷・丸の内 / 代々木・渋谷の3エリアを中心に
都市を舞台に多彩な街なかアート・エンタメ企画を展開

東京都および東京国際文化芸術祭実行委員会は、2026年10月10日(土)から12月31日(木)まで、都市を舞台とする新たな文化芸術祭「ARTE TOKYO (東京国際文化芸術祭)」を開催します。

本芸術祭は、秋から冬にかけて東京で催されるアート、演劇、音楽、イルミネーション、エンターテインメントなど多彩なプログラムを結び合わせ、ひとつひとつの輝きを都市全体の魅力として描き出すフェスティバルです。東京という高い密度と多層的な景観のおかげで、人々の多様な活動が折り重なる東京という都市にアートを核とする文化芸術の創造的な営みを掛け合わせ、新たな景色を立ち上げ、まちを巡りながら発見と感動が連続していく、これまでにない都市型文化体験の創出を目指します。

初開催となる2026年は、臨海エリア、日比谷・丸の内エリア、代々木・渋谷エリアをコアエリアに、様々な催しと連動しながら、公園や水辺などの街なかで東京2020大会文化プログラムのリバイバルをはじめとする多数のアートやエンターテインメント企画を展開します。

ARTE TOKYOが紡ぎ、描き出す「新しい秋冬の東京の風景」にぜひご期待ください。

あわせて、本芸術祭を共に盛り上げていただける多様な文化芸術プログラム（パートナープログラム）を本日より募集します。多様な主体による催しとの広報連携やネットワーク形成等を通じて、魅力的な取組が響き合い、東京の一体感を形成するとともに、エリアを超えた相互送客につなげてまいります。たくさんのご応募をお待ちしています。

ARTE TOKYO公式サイト：<https://artetokyo.jp/>

ARTE TOKYO の全体像

3つのプログラムを ARTE TOKYO として一体的にプロモーション

CORE AREA

臨海エリア

日比谷・丸の内エリア

代々木・渋谷エリア

コア
プログラム

実行委員会が主催する、ARTE TOKYOを象徴する中核プログラム
公共空間や民間施設など街なかでアート・エンターテインメント企画を多数展開

ハイライト
プログラム
※1

コアエリア内で実施される官民団体主催によるプログラム
コアプログラムと企画連動を図りながらエリア内の体験や回遊の連続性をひろげる

国際美術展 TOKYO ATLAS
東京アクアシンフォニー
イルミネーションアイランドお台場
臨海副都心イルミネーション
お台場レインボー花火
MEET YOUR ART FESTIVAL

丸の内エリア・イルミネーション装飾
日比谷マジックタイムイルミネーション
花と光のムーブメント(日比谷公園×アート)
KK線 アートイベント(仮称)

表参道イルミネーション2026
青の洞窟 SHIBUYA
代々木公園×夜間の魅力創出

都内各地

パートナー
プログラム

コアエリアを含む都内各地で文化芸術祭と同時期に開催する官民等団体主催のプログラム
ARTE TOKYOを共に盛り上げ、広報連携やネットワーク形成等を通じて、相互誘客につなげる

4/10より公募開始

※1 上記イベントは昨年度までの実績等に基づく名称・開催予定を含みます。今年度の開催については各主催団体の発表をもって正式な内容となります。

<本件に関するお問い合わせ先>

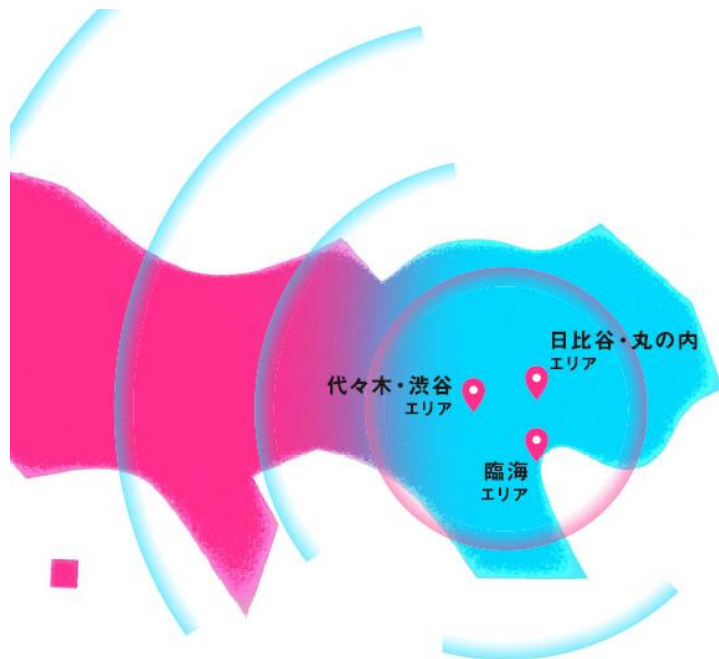
ARTE TOKYO PR担当：渡邊・窪田・中上・山本
TEL：03-5572-7375 MAIL：pr@artetokyo.jp

・ ARTE TOKYOの展開エリア

ARTE TOKYOでは、象徴的なイベントやベニューが集積する3つのコアエリアを中心に、パートナープログラム等との連携を通じて、多摩・島しょ地域を含む都内各地へと展開していきます。

都内に点在する個性あるひとつひとつの活動を結び合わせることで、東京という都市を面的にひらき、秋冬の新たな価値を浮かび上がらせていきます。

それぞれの地域が持つ魅力やネットワークを、ARTE TOKYOというプラットフォームのなかでゆるやかに繋げ、東京の文化的価値に新たな層を重ねていきます。



ARTE TOKYOの広域展開イメージ

・ ARTEコアプログラム

ARTEコアプログラムは、東京の街なかにアートをはじめとする文化・芸術を広げ、都市と人の新たな関係を紡ぐ、ARTE TOKYOの中核プログラムです。

芸術文化が都民のくらしのインフラとなるよう東京都が推進してきた取組を体現するプロジェクトとして、公共空間や民間施設など街なかを舞台に多くのアート・エンターテインメント企画を展開します。東京2020大会の文化プログラムの一部を再現するとともに、これまで支援してきたアーティスト・クリエイターも積極的に起用し、東京ならではのクリエイションを創出します。

コアエリア内で展開される多様なイベントやベニューと連動し、相乗効果を生み出すことで、文化体験の連続性とエリアの回遊性を高めてまいります。

詳細情報は順次お知らせします。



撮影：金田幸二 KANEDA Kozo
《まさゆめ》目 [mé], 2019-21, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13



Photo : Keizo Kioku
《Gravity and Grace》大巻伸嗣



《空気の人》鈴木康広



© Nobutada Omote
《うみのハンモック》永山祐子建築設計



《影絵パフォーマンス》川村亘平



大道芸パフォーマンス (イメージ)

※写真はイメージです

・コアエリアの展開構想

ARTE TOKYOは、「臨海副都心」「日比谷・丸の内」「代々木・渋谷」という異なる個性を持つ3つのエリアを中心に、都市の新たな体験と価値を、アートやエンターテインメントなどを横断する多様な表現によって編み上げていく文化芸術祭です。

街なかには展開される現代アートやイルミネーション、舞台芸術、音楽、パフォーマンスなどのプログラムは、都市に新たなリズムと視点をもたらし、人とまち、まち固有の文脈との新たな出会いをもたらします。また、暮らす場所、働く場所、買い物をする場所、遊ぶ場所などと使い分けられた都市の境界をゆるやかに溶かし、異なる活動や時間が重なり合うことで、都市の持つ多層的な魅力を再構築します。

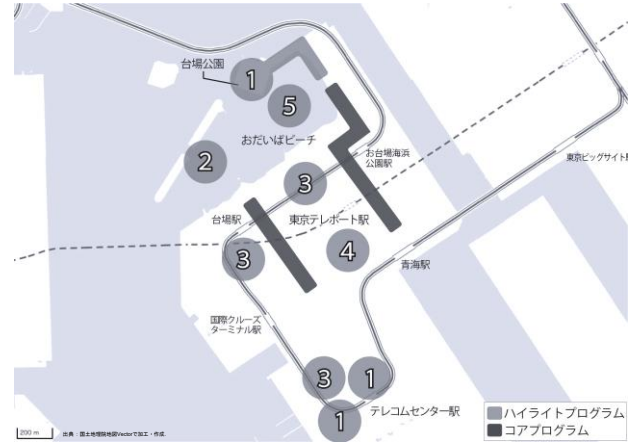
都市そのものを舞台とし、来訪者一人ひとりの身体的な移動と感覚を通して、東京という重厚な地層の上に成り立つ都市の新たな「遊び方」を提示します。

臨海エリア

東京港を借景に、レインボーブリッジや東京タワー、高層ビル群がまちの輝きを彩る、開放的な都市空間。エンターテインメントのコンテンツが集積する臨海副都心を、ひとつの大きなプレイグラウンドにします。

2026年3月に運用を開始した「東京アクアシンフォニー」の噴水演出や、本芸術祭と同時期に開催される「国際美術展 TOKYO ATLAS」、臨海副都心の風物詩である「イルミネーションアイランドお台場」などと連動しながら、スケールを生かした、没入的な体験を広げます。

お台場海浜公園の水辺のきらめきと、臨海副都心の都市インフラが生み出すコントラストのなかで、光や水、音が重なりあい、時間の移ろいとともに風景が変化。砂浜は自然のキャンパスとなり、人が過ごすことで風景の表情が変わっていく。多くの人々が通過するブリッジは、いつもとは異なる姿へと転じ、非日常の空間をさらに演出します。



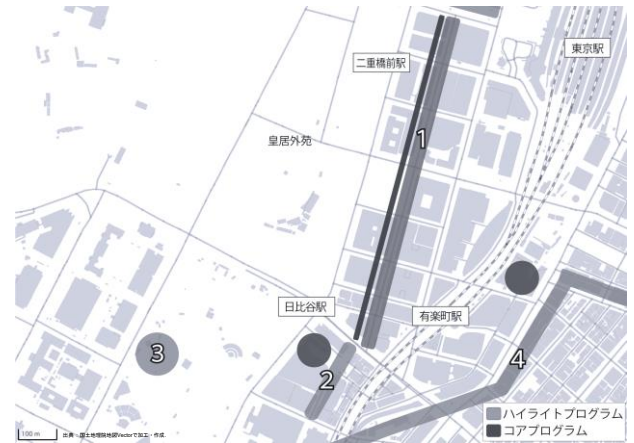
日比谷・丸の内エリア

高層ビル群と緑が調和する、歴史ある都市空間。オフィスワーカーや買い物客、観劇客などが行き交うこのまちに、普段とは異なる景色を差し込み、新たな出会いと気づきを生み出します。

丸の内から有楽町、日比谷へと連なるストリートに広がる、イルミネーションの煌めき。日比谷公園やKK線（旧東京高速道路）で展開されるアートや文化芸術プログラムと響き合い、特別な体験がエリア全体へとじみ出ていきます。

この季節ならではの情景のなかで、通りや広場は、行き交う場から、集い、佇む場へと変わっていく。固定化された場所の役割がゆるやかにほぐれ、都市の新たな可能性がひらかれていきます。

まちに点在するアート作品がもたらす小さな違和感と、人の流れをゆるやかに変え、通りから通りへと回遊を生み出す。いつもと違う視点でまちを眺めることで、これまで気づけなかった都市の風景が見えてきます。



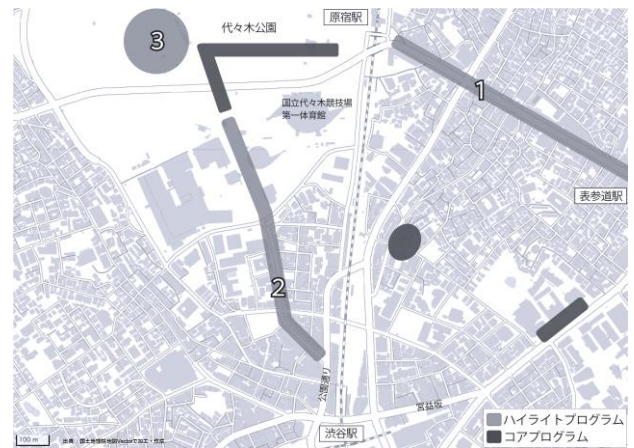
代々木・渋谷エリア

若者文化やクリエイティブが交差するカルチャーの発信地。建物や人の密度が高く、情報や音が重なり合うこのまちでは、歩くことそのものが体験となります。

まちの各所に点在する場所をつなぎながら、人の流れに沿って新たな視点と体験が立ち上がっていく。にぎわいの中にまぎれ込むように、アートとの出会いが生まれます。

このエリアの冬の顔になっている渋谷公園通りや表参道のイルミネーションと呼応するように、代々木公園は夜を中心としたアート空間へと変化。周辺エリアを横断的に接続することで、都市空間そのものを一つの舞台として拡張します。

さらに、「旧こどもの城跡地」周辺をもうひとつの結節点に位置付け、都市に潜在するレイヤーを浮かび上げさせます。歩くほどに発見が重なっていく。まちを巡るたびに、出会いが連なっていきます。



・パートナープログラム募集開始

ARTE TOKYOと連携し、会期中の東京を一緒に盛り上げていただける文化・芸術・エンターテインメントに関するプログラム「パートナープログラム」を4月10日(金)より公募開始します。

パートナープログラムはARTE TOKYOを形成するプログラムとして、ARTE TOKYO公式広報媒体での紹介や情報発信、関係団体とのネットワーク形成など多面的に連携します。相互誘客・相互送客を図るほか、プログラム同士の連携を通じて企画面での連携も目指してまいります。

- 募集期間：2026年4月10日（金）から5月15日（金）まで
- 対象事業：本芸術祭の会期中に東京都内で開催される文化・芸術・エンターテインメントに関する取組等
- 応募要件・方法等は詳細情報はARTE TOKYOの公式WEBサイトをご覧ください。

公式WEBサイト公募ページ：<https://artetokyo.jp/ja/news/koubo/>



・主催挨拶

アート溢れる景色を広げ、この街に暮らす人々の日常と、東京を訪れる人々の経験をより豊かなものにしたい。こうした思いのもと、東京都は2026年より、都市を舞台とする文化芸術祭「ARTE TOKYO」を開催いたします。

アート、演劇、エンターテインメント、イルミネーションなど、秋冬の東京を彩る催しを結び合わせ、各々の輝きを都市全体の魅力へと高めていく新たなフェスティバルです。東京が誇る美しい公園や水辺などをステージに、多くのアーティストやクリエイターによる交流と創造が生まれ、訪れるたびに新鮮な発見と感動に出会える——そんな景色を広げてまいります。

表情豊かな水辺と賑わいにあふれる臨海エリア、文化と経済が交差する日比谷・丸の内エリア、若き感性が多彩なカルチャーを生み出す渋谷・代々木エリアをはじめ、都内各地のプログラムが響き合い、伝統と革新が共存する国際文化都市・東京ならではの祭典として、秋冬の東京に大きな磁力を生み出します。

芸術文化には、人と人を結び、都市の未来を切り拓く力があります。本芸術祭を契機に、クリエイティブの力で世界を魅了する東京の未来像を描いてまいります。どうぞご期待ください。

東京都知事

小池百合子



このたび、東京の新たな文化芸術祭「ARTE TOKYO」を開催する運びとなりましたことを、実行委員会を代表してご報告申し上げます。

東京が今、文化芸術祭を開催する意義とは何か。ARTEという言葉には、芸術を意味することはもとより、人々の営みの中で育まれてきた創造活動や文化の力を都市にひらこうとする思いを込めました。

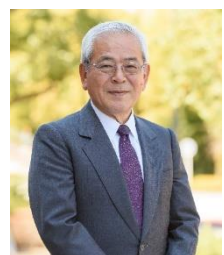
都市とは歴史の積層の中で人の手と精神が織りなしてきた文化の集積です。成熟した都市はその豊かさゆえ、ときに創造の勢いを緩め静かに澱（おり）を宿します。芸術文化はそこに揺らぎをもたらし、社会に新たな息吹を吹き込む力です。

本芸術祭は都市を舞台に多様な表現と対話を重ね、人と人、個人と社会を結び直す場を創出するものです。それぞれが「ここにいてよい」と感じられる居場所を育みながら、東京に創造の営みが息づく循環を生み出してまいります。

本芸術祭を皆様とともに育てていけますよう、広くご関心とご支援を賜りますことを心よりお願い申し上げます。

東京国際文化芸術祭実行委員長

青柳正規



©多摩美術大学

・開催概要/実施体制

| | |
|---------|---|
| イベント名称 | ARTE TOKYO (アルテ・トーキョー) |
| 開催期間 | 2026年10月10日 (土) -12月31日 (木) |
| 開催コアエリア | 臨海エリア、日比谷・丸の内エリア、代々木・渋谷エリア |
| 主催 | 東京都 東京国際文化芸術祭実行委員会 (委員長 青柳 正規 (東京大学名誉教授、アーツカウンシル東京機構長)) |

ARTEクリエイティブチーム

| | |
|------------------|------------------------|
| ・統括プロデューサー | 齋藤 精一 (パノラマティクス 主宰) |
| ・統括セノグラファー | 永山 祐子 (永山祐子建築設計 主宰) |
| ・ARTEプログラムディレクター | 青木 彬 (藝と 代表) |
| ・ARTEプログラムディレクター | 井口 皓太 (CEKAI 代表) |
| ・ARTEプログラムディレクター | 吉田山 (FLOATING ALPS 代表) |
| ・ARTEセノグラファー | 西澤 徹夫 (西澤徹夫建築事務所 主宰) |
| ・ARTEセノグラファー | 森 純平 (interrobang 代表) |
| ・ARTEアートディレクター | 木住野 彰悟 (6D 代表) |

・ARTE TOKYO (アルテ・トーキョー) の名称等について

イベント名称

ARTE TOKYO

ARTEは、ラテン語の「ARS (技芸・才能)」に由来し、イタリア語・スペイン語で「芸術・アート」を意味します。ARTE TOKYOではこの言葉を、アートを基軸に、Technology, Entertainment, Experience, Engagement, Ecosystemなど、多様な領域が交わり合う概念として捉えています。それらがつながり、重なり合うことで、都市に新たな体験が立ち上がる。文化芸術を通じて、人とまちの関係がひらかれ、都市の魅力が更新されていく。その試みが、東京という都市の中で動きはじめます。

メインロゴ



このロゴマークは、東京都の輪郭をモチーフに構成しています。都市の形を一度切り取り、再構成することで生まれたラインは、東京という都市をひとつの「枠組み」として捉える視点を示しています。ARTE TOKYOは、単一のイベントではなく、この枠組みの中で多様な出来事が立ち上がる「場」です。さまざまな文化や表現が交差し、新たな関係性や価値が生まれていきます。その可能性を受け止める器として、包み込むような「括弧」の形で構成しました。カラーは、歴史と未来、情熱と知性、テクノロジーと人、そしてARTEの由来であるアートとエンターテインメントといった、東京に共存する多様な要素を重ね合わせるように、2色のグラデーションで設計しています。境界を設けないこの色のつながりは、異なる領域を横断しながら、東京の芸術・文化・エンターテインメントを大きく包み込んでいく、このイベントの姿そのものを表しています。